



生物と数理モデル

私は、複雑さから秩序が生まれる仕組みを明らかにすることが生物の本質を深く理解することにつながると考え、生命のロジックを追求する数理生物学の道に進みました。大学院在籍時には、最も複雑な系と考えていた熱帯雨林で数年一度さまざまな植物種が同調して一斉に開花し大量の実をつける「一斉開花現象」に魅了され、一斉開花および繁殖の豊凶現象の仕組みを明らかにする理論研究を開始しました。現在に至るまでこの研究テーマがライフワークとなっています。

自然を探求できる環境を身近に

これからの生物学は、生態学がもつ多様性の視点と分子生物学がもつ普遍性の視点を結びつけることが非常に重要であると考えています。異なる分野を自由に行き来するには、数理生物学がもつ

佐竹 暁子

専門分野：
数理生物学

「一見するとまるで違う対象の間に類似性や共通性を発見する力」が欠かせません。こうした発見をするには、自然と一体になることが必要だと思っていて、様々な動植物と身近に交流できる地域に住んでいます。先日はアナグマが我が家の庭に現れました。また、春夏秋冬のはっきりした日本とは異なる自然を目の当たりにする経験ももっと多く積みたいと思って、特に中米・南米が好きなので機会を見つけて訪れるようにしています。そうすることで、生物の多様性が生まれる原理を分子レベルで明らかにする原理とはなにか、探求していきたいです。

メンターやパートナーなど 出会いに恵まれる

大学で素晴らしいメンターの先生に出会えたこと、優れた研究者の方々と一緒に研究できたこと、そして良きパートナー



函館にて植物採取

と出会えたことは、とてもラッキーでした。夫も九州大学の教員を務めており、共同研究をしているので論文も一緒に出していますし、家では研究や文学・歴史など多様な話をできるまたとない存在です。女性研究者は特に、夫婦ともに科学者というカップルがとても多いと思います。

ベストよりベター

研究は、夢中になって没頭するほど面白いものです。ただ、うまくいかないことも多く、常に行き止まりのように感じられる壁にぶつかる場面に頻繁に出くわします。こういう逆境でも諦めず、小さいことにも喜びを感じ一歩ずつ進んでいく姿勢が、壁の突破につながります。今日より少しでもベターな方法を明日は見つかる。私は、今日は論文用の図が少し良くなっただけで嬉しいです。

略歴

九州大学大学院理学研究科博士課程修了、ペンシルベニア州立大学、京都大学、プリンストン大学、スイス連邦工科大学水圏科学技術研究所グループリーダー、北海道大学准教授を経て2015年から九州大学大学院理学研究院准教授、2018年同教授に就任